

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第11回）「心の教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成22年5月17日(月) 午後4時02分～午後6時38分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	生越詔二、福田純子、久能正吾、濱元雅俊、相田真人、小林昭文、鈴木芽吹（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	小坂橋悦子 指導主事

1 はじめに

アドバイザー

これからは実際の指導に当たっている先生方が、児童、生徒の実態に基づいて、あり方、指導の仕方を提案をしていただく、普段の力を発揮していただく時間になるのでは。

2 討議

事務局

事務局より、まずカリキュラムの一覧と練馬区小中一貫教育資料作成委員会第1回の要点録に訂正があれば朱を入れて送っていただきたい。

本日の進め方、いよいよカリキュラム、特に本年度は学習指導案を具体的に作成し示していく段階になっている。そちらの作成の分担に入れれば、「心の教育の推進・カリキュラム一覧」ということで、項目、学年別に丸印、教科または領域を入れたものを、事務局からの提案ということで作成してみた。これを元に、どの項目をどの学年に指導案として載せていくかというような話し合いができれば。それができたら、資料作成の分担を決めて資料などを次回までに持ち寄っていただき、作成に入っていくところに進めたい。

特に教育委員会としてやっていただきたかったのは、規範意識の第5学年と第8学年。情報モラルに関する講習会を、小5と中2で昨年度から実施しているので、ここで必ず情報モラルに関する指導プラスそれに関わるものを、小5は学級活動で、第8学年は道徳などを活用してさらにそれを高めていく資料ができればと考えた。

社会連帯の自覚については、中学生になると職場体験、自分の今後の進路を考えると大変重点に関わると考え、第Ⅲ期に重きを置き、小学校段階では5、6年の総合的な学習の時間、地域指導などを活用した道徳などで重点として入れられるのではないかと。

思いやりの心についてはそれぞれ1、2年の生活科、4年、第7、8学年それぞれの各期の終わりまたは始まりのところに置いて、確認し指導していくという時間を取ったらどうか。自尊感情については、今の子供たちは自尊感情や、自己肯定感も低い子供たちが多ので、2学年おきに必ず1度は指導して自尊感情を高めていく指導を大事にしたらどうか。生命尊重については道徳だけではなく、例えば6年では理科で生命尊重に関する内容に関係した学習があるので、その辺りも視野に入れながら生命尊重の学習を組んだらどうか。

まずはこれを叩き台にして、今日はプランを作っていけたら。心の教育の推進部会で割り当てられているページ数は70ページ。それを割って五つの項目で計算すると14ページぐらい。

アドバイザー

理念が、多くても4ページ。結局カリキュラムとして、使い方だとか作成にあたってといった部分は多少説明が必要になると思う。

委員

そうすると、この案では22カ所丸がついていて、3ページずつぐらいだと66で理念が4ページだと70になると理解した。

資料について、中間報告書を元にどういう思いでということを書き込んだものを作った。去年は自尊感情を担当したので、1年生から9年生までどんなことが想定できるのかを考えた。

やはりこの五つの項目の中で一番ベースになるのは、自尊感情、自己肯定感かと思う。この自己肯定感は、家族の中で認められていくことから他者を理解していく、そういうベースを学校教育の中でも擬似的に持ってこない、思いやりという方向に発達段階的に行かないのではないか。すべての学年で、すべての項目を扱っていくことになると思うが、特にどこを重点的にやったらいいかを考えると、やはり自尊感情からスタートしてそこに規範意識を乗せて、次に思いやりを重点としてその上に乗せるようなつもりで重点化していく。そして生命尊重をやって、社会連帯を最後に乗せていくような、重みのつけ方をしたい。

小板橋先生から提案があったものも、現場の教員として考えると、やはり規範意識と自尊感情あたりから資料を見たい。このレジユメの緑側の項目については、去年の中間報告でそれぞれの項目でも出ているはずだから、次のレベルに上がっていくところが資料として提示できると、なぜそこに育てたい子供像を変えたのか意図もはっきりすると思う。

委員

まず子供像のところでごシックになっているところ。もう一回中間報告を見ると、ここは文言を変えたほうがいいのでは。

主な学習活動のところ、実際に桜小で指導していて中学校との接続を考えると、5、6、7年生がどうモチベーションを保つか非常に大きい。4年、10歳のところで考えられるのが2分の1成人式。自分をここまで育ててもらったこと、大切にされてきたことを振り返って、これから先10年、成人式に向けてどんな人生を歩むか、どういう目標を立てていくかといった式を行えるといい。小中一貫校として考えるのであれば、10歳から20歳までの中間地点の14、15歳の子供たちが2分の1成人式に参加する形を考えると一貫校らしさが出る。この2分の1成人式が、I期からII期に変わる意識を持たせる式としてやれるといい。

II期の最初の5年では理科の生命のつながり、誕生、生命の連続性を扱って、例えばゲスト・ティーチャーとしてお腹に赤ちゃんのいるお母さんを招いたり、道徳と関連させることも考えられる。6年で特別活動、いただきますとは何だろうというところから入って、食物連鎖や理科、食育とも関連させながら生命に関して考えさせる機会として何か取り組めないか。

委員

去年の資料の中にもう一回見直したらいいものがあったので、今年から入った方は見せてもらう機会を持たせたい。

資料に関しては社会連帯を調べると、いろいろな課題が重なりつながり合ってくる。その中で一番多く出たのは、社会連帯と特別支援教育とか、社会連帯と福祉園、障害を持ったお子さんとのつながり、どう認めていくかとか、お互いにどういう連帯をして支えあっていくか。小学校から中学校の学校行事や特別活動、道徳などを振り返って、社会性を育むとか、お互いの連帯意識を培っていく行事等を洗い出した。入学式、対面式、迎える会、当然卒業式、送る会、お別れ会、それと日常的には当番活動。給食当番から清掃、日直その他ありとあらゆる当番。それから係、委員会。中学校へ行くと生徒会になっていくのか。区も積極的に活動している。クリーン運動、奉仕活動、かなり直接的な福祉園や施設の訪問活動。また、学校内で取り組めるものとして、アイマスクの経験とか重りを身につけるといった、子供たちが実際に体験して活動できるようなものの中にも十分素地となるものを培う学習ができる。直接的に道徳と考えたときには、やはりいじめや不登校、人権障害問題、バリアフリー化等の学習を道徳で取り上げることによって子供の気持ちや意識を、社会連帯につなげていくことはできないか。

特別活動では、異学年交流で学校の中で一つの組織で動いていく中で上は下を慈しみ、下は上を敬う、そういう思いが学べないか。学級においては代表委員会や学級委員、生徒会の役員、子供自身が運営していく体育的行事なども、連帯感が培っていけるのではないか。それから地域における行事、町会的な行事や地区祭、お祭、夏祭り行事等への参加は、比較的重要な社会連帯意識を育む土壌になっているのではないか。光が丘少年少女消防団というリーダーを育てる組織を練馬区では作っている。そういうことへの参加を促すとか、学校だけでなく地域やPTA、包み込んでいくいろいろな活動がある。

アドバイザー

基本的な方向はよいのではないか。小林先生の案と部会メモ用カリキュラム一覧を重ね合わせた方向で考えていくと、考える軸がはっきりする。利用者にとって非常に分かりやすい、いい方向性。このフレームがあれば全体の方向は間違いにくい。心の教育独特のやり方で心を育てるために、こういう観点でこの欄を使う、ということでもいい。心の教育だけのプランニングを出したのでは、指導する先生から見たらつながってこない。具体的な活動の中身がこういう関係の中に位置づけるのだということであると、昨年の中間発表のどこかに加えてもいい。

事務局

事務局としては 22 個もつけたが、すべて必ずということではなく、この話し合いの中で項目を絞っても加えても構わない。

事務局では総合的な学習の時間として考えたのは、やはり職場体験が中学校では2年から出てくるので、総合として取り組む学校が多い。また学年の段階を考えると職場体験。3年になると進路があり、その辺から職業を選ぶ、進路を選ぶことで総合が一番関わりある。

委員

この中間報告でキャリア部会が実際に職場体験を取り上げて、第Ⅲ期における実践例を中2で 19 時間扱いでやっている。キャリア部会と心の教育推進部会で同じ職場体験を取り上げて、角度を変えてやっても問題はないという捉え方か。そうするとこの 22 は、単純にこの言葉が入っているのではなくて、それぞれ事務局の狙いがあるってこれにしたというものがある。

委員

もう一つ、例えば理科の6年で生命尊重が入っているが、9学年、中3で生物界のつながりという食物連鎖が入ってくる。そうすると6年でやって9年でやらないと、理科としたらレベルの高いところをやっているのにできないというのがあって、両方やればいいのか。両方やると6年のほうが無駄になるのか。

事務局

例えば小6で理科、第9学年では道徳で取り上げているけれど、この9学年のところを理科にするという考え方もある。

委員

心の教育部会で道徳とリンクさせることはもちろんだが、他教科のことが入っていたほうがよりよいと思った。

委員

小林先生の表でいうと、想定できる主な学習活動、濱元先生も主な学習活動、久能先生も学習の内容が出ていて、この表は必要。例えば生命尊重の理科と道徳の話で言うと、生命尊重の6年の主な学習活動のところにも理科でのそういう扱いがあるとこの表に載っている。主な学習活動のⅢ期の9年生のところにも理科も道徳も載っている。この丸が付いているのは、載っているものの中である程度抽出して、皆さんがやりやすい一つの指針としての提示という位置づけ。だからこの主な学習活動にある程度網羅的なものが載って、その中からサンプルみたいなものが22個になるのか、という受け止め方でいい。

アドバイザー

道徳でも理科でもいいと思うが、理科となったとしたら生命尊重に関わる部分、本部会でどうしても提案したい部分、あるいは子供たちに分からせたい部分を特化して、ねらいのあたりに書いていただくとか、6年生での学習のつながりとか。一貫の資料になるので、つながっているのがより分かるようにしていただければ。ぜひとも本部会では提案してやっていただきたいところ、全部があつてその一部でここを使ったらどうか、という形にしていきたい。

委員

このマトリックスを作るときに、自分だったらどんな資料を使いたいかと考えた。心の教育は捉えどころがない部分がある。ただ、現場にいる先生方は自己肯定とか自尊感情を伸ばすにはどうやったらいいのかとか、社会連帯はどういうもので付けたらいいのかとか、そういう手がかりになるものがほしい。資料として何が提示できるかと言うと、緑で書いてある言葉を出したくて作業した。例えば道徳で何をやったらいいのかとか、一覧表で見られるものがあるとそこを目安にできる。一番ポイントにしたいことは何なのかと重点を押さえたら、どんなことをやったらその重点がクリアするのか考えた。

私が見たいのは、主に自分自身に関することという領域のものが、小1が使う道徳の教科書

ではどのページという具体的なデータ。教科についても、こんなところが触れられているとある程度分かるもの。こういう具体的なものがあるって、この中に家庭との連携で小1のところに資料1と書いてあって、その資料1に具体例で何ページに書いてある。何ページに何コマ扱いでやるこういう例があるというのが載ると、この資料を何年か使うのであれば、そこから発展させて違う方法もあるのではないか。初めのこういうマトリックス的なものが見開きで2ページずつ。それで10ページだが、残った60ページを、そのマトリックスから何ページという形で見ると、もっと具体的に見られるというようなものであれば、使ってみたいかと思う。

アドバイザー

これだと非常にわかりやすい。心の教育だから、例えば道徳の欄を少し幅広くする。家庭との連携は、幅は細くてもいい。各教科も関わりがあるところ、具体的な内容を拾ってやや枠を広げる。もう一つの地域連携も、家庭との連携と同じぐらいのウェイトで軽重をつけてもいい。恐らく落とすところとして指導要領に書いてある内容項目は10年ぐらい変わらないと思うから、それを落とす。

方向性はそれでいいと思うが、もう一つ協議しなくてはいけないのは、このマトリックスの哲学、考え方を鮮明にすること。文言を書かないと分からないようでは困る。取り上げた理由をある程度ここで共通認識しておかないと、後でブレが生じる。

心の教育とこの部会ができた背景は中1ギャップ、つまり成長と内容の連続性というようなイメージを求められている。そのことが連続性と心の教育から考えて、こういった教科・領域でいいのか、悪いのか。すべては載せられないので、ピックアップするときの考え方を議論して、緩やかな共通理解をしておかないと、できあがったときに統一が取れない。

事務局

小林先生が作ったものが最初にあり、そこから道徳や教科のところをピックアップしたものが資料、指導案になり、およそ70ページの心の教育の推進部会の資料の形になる。

まず、心の教育と中1ギャップ等のことを考えた指導の連続性がポイントになってくるので、その辺りの共通理解、統一性を図らないと、整合性が難しくなるとの指摘を受けた。

まず規範意識、学年が小さいうちからしっかりとルールを守るとか、学校のきまりを守るとか、そういう意識を身に付けさせることが大切。人としてやってはいけないことはやってはいけないのだということを指導していくことが必要なので、まずは1年生でしっかりと指導し、各期に必ず1度は指導する。第I期の中で2回、1年と3年のところで重点として指導をする、皆さんにアピールしておくことが必要なのではないかと考えた。

委員

1年でやりたいのは、小1プロブレムの対策ということが大きいのか。

事務局

それもある。でも学校とはしっかりとルールを守ってやっていくところ、そうすることで皆が気持ちよく生活できるという基礎を押さえていくことが重要かと考えた。

アドバイザー

規範意識で物語でつながるといい。そうするとイメージしやすい。今のが一つの入り口で、それぞれ皆ポイントは大事だけれども、まず集団生活の場で最も大事なところ、そこから成長すると、これを取り上げ、もう一つ成長したらこれという物語ができるといい。そうすると説明しやすい。ここでは心に傾斜したものを道徳の時間、あるいは道徳教育以外も含めて特色あるものとしてピックアップする。そうすると、利用する人たちも、あるいは説明する側もしやすい。受け取るほうも理解しやすい。

委員

小学校の先生に伺いたい、第6学年で切ったときに、この規範意識は学級崩壊などを押さえるのに、どの学年で何をやったら効果的だと考えるか。

これと、自分が認められていくという自己肯定感を付けるような、集団遊びみたいなもの。中1で、うちの学校はかなりソーシャルスキルをやる。まず仲良くなり、知り、楽しむ。楽しいが、お互いに居場所ができたら、ルールって大事だと進んでいく。小学校の積み上げがあるからできる。小学校はどう仕切っていくかがここに書いてあると、小1プロブレムで困っている学校はたくさんあるはずだから、資料として価値がある。やはり1年生で入れてほしい。

委員

規範意識は1年生で、各校の取り組みの実践事例の、典型的なものなり何なりを入れるのはすごく妥当。先ほどの小林先生の話の中にも五つの項目の構造化みたいな意識をお持ちだ。何がベースでその次に何といった、それは一つひとつの実践事例の提示だけでは含みきれない部分。だからこそページの割り振りを考えなくてはと思うが、理念の部分が4ページで、そこに五つの項目の構造的な捉え方とか、実践を取り上げたピックアップの道筋とかで触れることができ、かつそれぞれの五つの項目のうちの見開きの2ページはある程度の枠を整理したものが入る。残ったものを計算してみると、一つの丸が2ページ当たりで、指導の流れと留意点、子供の反応といった形で1冊というイメージ。

アドバイザー

今のこの部会の流れからいって4ページでは収まりきらない。ページ数については、増えても構わないということは内々にはある。あまりそれにこだわらなくていい。

アドバイザー

漏れ落ちがないように、これが基本的な考え方。バランスもある程度考えて。

考え方として、小林先生の案が構造化。道徳の内容、価値に関して、あるいは心に関して構造と言うのは非常に難しい。縦横の関係という捉え方でいいのではないか。

最初に規範意識のところを入念にやっていただいて、似たようなことでほかができないか。バランスを考えるとこのような議論の方向でいかがか。規範意識のところをどう物語を作るか難しい。個人的な見解を言うと、小1プロブレムと中1ギャップの辺りに何を持ってくるか。どこに何を置くかというときに、個人的には学校種別が変わるときの、前がいいのか後がいいのか。その辺りを議論して、中身としてこれをやったらやりやすい、実態に即しているといっ

たことも一つの理由になる。そういう方向で、数も考慮に置きながら議論したらいい。

委員

規範意識は小学校に入ってきたときにはマナーのレベルで始まるが、最終的には世の中には法律やきまりがあって仕組みにつながるもので、人権につながって、人権をちゃんと保障するものだという上位概念にくっついていくもの。

1年生ではちゃんと座っていられるなどは押さえないといけない。第Ⅱ期ぐらいには社会性が出てくるから、情報モラルで扱ってもいいのではないかな。実際に今やっているプログラムを有効に取り込んでいくのが一番現場には無理がない。第Ⅲ期は社会科ではだめか。そういうようなもので規範を大事にしていこう、ルールによって仕組みができて、その仕組みによって私達の日常生活がいろいろ影響を受けている。私達がよりよく生きていくためには、よりよいルールを作ってシステムにしていくことが大事というところに結びつけられるような教材を見たい。これは社会連帯などにもつながる。規範意識は人権問題、人権教育だと思う。

去年決めた内容で考えると、この文言に最終的に収れんしていくような教材を狙っている。学期ごとに規範意識を育てたい、育てたいからこういう教材である、そういう筋が通っているもので、それが分かりやすく表現できればいいのではないかな。

事務局

考え方の元として、中間報告の 22 ページに載っている「心の教育の推進」指導プラン例の、学期ごとに育てたい子供像のところをお話していただいた。それをどこの学年にしていくのが相応しいのかという考え方をしていけば、取り上げていく学年と、必要な教科または領域が決まってくるのではないかな、というお話だった。

今の話を元に、規範意識をもう一度考え直してみると、最初のところの約束やきまりが守れる子供の第Ⅰ期では1年生は欠かせない。第Ⅱ期、情報モラルということで、法やきまりを守り、自他の権利を大切にするとともに、義務を果たせる子供のところで考えていけば、情報モラルを学習する第5学年で学んでいくのはどうだろうか。第Ⅲ期については、法やきまりの意義を理解し、社会の秩序と規律を高めようとする子供ということで、社会科で取り上げてはどうかという意見で、社会科だと9年生で公民で、考え方の統一感が出てくるかと思う。

アドバイザー

実際やっていくときに、これは難しいということは今後出てくる。基本的なところだけは合意しておいたらいい。例えば形式論理と何度も言っているが、例えば原則1期に最低1個。これだけでは不十分であるものについてはもう一つ丸を付けてもいいぐらいの、緩やかなスタートをする。

例えば自尊心は案として1年生のところに入っているが、今の子供たちを見ると、小3、4ぐらいからどんどん低下する。というようなことを考えると、小1よりはもう少し後ろにウェートをかけたほうがいいのかということも内容によっては出てくる。最低一つということで、あと何にするかという辺りが、分担とその人の考え方になってくる。

委員

まずアウトラインができればいいと思うので、規範意識については1年生、5年生、9年生みたいなイメージで、次の生命尊重に。

事務局

生命尊重では、第Ⅰ期の学習期に育てたい子供像は、自分が生きていることを実感し、生命あるすべてのものを大切にすること。学年ごとに育てたい子供像については1・2年、3・4年でまとめて記している。第Ⅱ期は、生命がかけがえのないものであることを理解し、自他の生命を大切にすること。Ⅲ期は、生命の尊さを理解し、自他の生命を尊重し、大切にすることの態度を身に付けた子供となっている。そうするとⅠ期ではどの学年がよいか。

委員

何がⅠ期とⅡ期とⅢ期で重点か。それがわかると、出てこないか。

委員

教科、道徳、総合の具体的な単元を思い浮かべるところからスタートしている。2年生だと自分が生まれたときの生活科で、小さい子の写真を集めてお母さんにインタビューする単元がある。4年生で2分の1成人式。それは自尊感情も関わると思う。

ここでこれが必要だからという考え方と、各教科、道徳などでこの単元でこれには典型的だといった発想も、必要かもしれない。

事務局

私もそこをイメージした。自分が生まれてきたときのこととかを振り返るところがあり、そういう中で自分が尊い存在だということに気付くことができるイメージ。

アドバイザー

ここは物語が作りやすい。素朴な生命尊重感。小学校1・2年生でも命は大事だと知っている。実践できる、自覚するかは別にして。それがずっと第Ⅲ期まで貫かれているベースになるもの。生活科と教育活動を通じてそのことを意識するための具体的なものをたくさん集めてきて、生活科で指導をする。今度はもう少し成長するに従って、生命科学という意味で、命を自然科学的な観点から捉える。そして最後にⅢ期にそれを使用する。

事務局

2年生で生活科、5年生の理科、3年生は道徳で話が出て、また理科というお話もあった。また、4年生で、体育の保健領域でやってもよいのではないかと。

委員

はずしたくないところだけ決めれば。2年生は当確でいいか。

委員

4年生はどこかで2分の1成人式を入れたい。

委員 事務局

自尊感情で入れたらいかがか。

委員

3年生だったら典型的に何が入るか。

委員

社会連帯の社会。

委員

初めて集団を意識するのが3年生。ギャングエイジ。地域学習は3年生。

事務局

生命尊重のところ、生活科は当確で、あと4年の保健、5年の理科と3年生の道徳は一重丸にして、自尊感情に話を進めたい。

自尊感情について中間報告書に立ち返ると、第Ⅰ期では、他者への信頼関係を持ち、自分の居場所を見つけられる子供。第Ⅱ期では、自分のよさに気づき、目標をもって努力していこうとする子供。Ⅲ期では自分のよさを伸ばし、自己実現しようとする子供。先ほどから出ている2分の1成人式が、自尊感情の4年生のところでは総合で取り上げると相応しいのではないか。

アドバイザー

練馬区内の学校では2分の1成人式という名称を用いての指導は、行われているのか。

アドバイザー

いろいろな学校の総合の計画の中にこの言葉はある。

アドバイザー

まさにこれは自己発見。自己の特色の発見並びに自信につながる中身。まさに自尊感情。

委員

具体的にどんなことをやるのか。小中が連携していないと、小学校の最後は最終学年というモチベーションの高さがある。中学校に入ってきたら最初だから、全く違う環境でスタートを切るという緊張感がある。小中一貫はそれがないから、それに代わるものを準備し、自信を付けさせるようなプロセスでもっていかなくてはいけない。それにはこの時期に自己発見とか、認めることがすごく大事なことだと思う。

委員

今までどうやっていたというより、それをベースとしながら新たに小中一貫に相応しい新たな2分の1成人式を組み立てればいい。うちでは保護者も招いて、子供の小さい頃の写真を1枚ずつ持ってきたのを当てながら、今の思いを子供は舞台上で一人ずつ語り、保護者に向かってお手紙を書いたり、歌ったり踊ったり。親は泣く。

委員

先ほど聞いたら、実際に置かれる桜小中では、4年生になると小学校の校舎から中学校の校舎に移るのだそうだ。場所も動くから、うまい契機でいい。

委員

もう来年度、23年度から50分授業で。

委員

4年生までの第Ⅰ期である程度のもをつくって、第Ⅱ期の5、6、7年生で中学校がやっているようなものもやらせて、第Ⅲ期の8年生、9年生ではもう少しレベルの高いところまで目指したいのなら、精神的には4年生の区切りはいい。これはとりあえず当確にしないか。この成人式は、この学校の一つの売りになるかもしれない。

私は自尊感情でこだわっていて、22ページを見ると第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期で私なりにポイントがある。第Ⅰ期はやはり他者への信頼関係と居場所。基本になるのは安心感。認められている、居場所がある。だから、入ってきたときに、小1プロブレムをある程度意識しながら、ここで皆が仲良くなっていくような遊び的なプログラムを一つ提示したい。そこで学校は楽しい、先生が言う遊びは面白いと学校にのって来るような部分、ルールをしっかりと守るとかっちり押さえる規範意識とは別のプログラムを提示したい。

第Ⅱ期、具体的に小3の自己肯定感がダウンしてくる、そのきっかけは何なのか。学校のルールでぶつかって何か自由度がないと思うのか何なのか。それを変えていくようなプログラムがあるのだったら提示できるといい。

委員

1・2年生は自分しかない。3年生になるとよその人が見えて自分なりの比較ができるようになって、常に自分が1番だったのが、あいつおれよりできるみたいなのが見えてくるから、それはある程度通るべきところ。自分だけじゃなくて他者も大事にする。そういう集団づくりが3年生になると必要という、ところにつながっていくかもしれない。

アドバイザー

自尊感情という抽象的な言葉で現場の先生方が苦勞してきたというのはつい最近の数年。そういう流れから言うと、提案をしてもいい気はする。

文部科学省が健全なる自尊感情、自尊心という言葉を使ったのは、非常に文化と結びついていて、自分自身に対して自分自身を確立することが非常に難しい。価値判断が他人に置かれている文化。他人と比較すると良くないとだめという文化で育てているから、分かってくると途

端に自分に対して自信がなくなる。要するに主体性がない。1・2年生は認知能力がまだない。認知能力が高まると、比較して成績が悪いのは恥ずかしいことだと周りが言う。しかしそういう周りの期待の意識に自分が応えていないという感覚を持つと自信がなくなってくる。それは学校の先生の指導の問題だけではない。自己決定を日本の子育てではあまり利用してこなかった。そういう意味で自尊心が一般的に下がってくるというのは、指導の問題だけではないということを強調したい。したがって大事なことに子供に気付かせる教育活動は何か。2分の1成人式が目玉になり得るというのは、自分に対して自信を持てるような活動を計画できそうだし、親や級友も含めて周りの人が認めてくれるという活動があるのが大事なこと。

もう一つ自尊心で言うと、マズローの自己実現の階層的な発達説がある。生理的な欲求があり、それが満たされない限り次のステップに行ったときに十分な発達が遂げられない。その次が安全欲求。自分自身が生きていること自体に不安がないこと。この欲求が満たされないと、次の承認の欲求とかにステップアップしたときに十分健全な成長が遂げられない。最終的に自己実現的な欲求になる。そうした面でいうと、安全、あるいは周りから認められること、こういうことをきちんと学校で、意図的に出せるような活動は非常に効果がある。

道徳で言えば個性とか、自分らしさみたいなものをどう気付き発見するか。それを実現するために何をどうしたらいいか。これは第Ⅲ期辺りが一番大きい。自己実現しようとするのは、相当自己が分かっているといけなし、社会とか周りとの関係をどう考えるかが決定的に影響を与える。

事務局

あとⅡ期とⅢ期でどこの学年でどの教科・領域になるか。

委員

僕はⅢ期の卒業期で、高校、進路、自分の行く学校を表明できない、それは情けないことだと思う。2分の1成人式があれば、明日僕はどこの高校を受けますというようなことが表明できるといい。お互いに、がんばれと拍手できたらいい。道徳ではなくて進路指導とかキャリア教育という場面でしょう。

委員

2分の1成人式でいくのであれば、自尊心で最終的には自己実現とはどういうものなのかというキャリア的なものが3年のときに出せるのがいい。それはキャリア教育の部会で触れられると思う。

アドバイザー

意外にキャリア教育だと、特別活動や総合的な学習の時間に特化した形のを提案してくるのではないかな。中学校だとそういう取り組みが多い。それを強化するとか補強するための道徳の時間の取り組みは、あまり意識されていないようだ。そういう意味で提案いただくといい。道徳の授業としての押さえ。こういう価値があるとここでいったん押さえてもらう。

委員

中3って、すごくプレッシャーがかかってやっているけれども、素晴らしいことをやっている。自分に挑戦している。それをもっと肯定的に捉えさせてあげるようなものを道徳的に入れるのはとても意味がある。

アドバイザー

接続期に注目していただきたい。Ⅱ期の充実が叫ばれていて、7学年辺りをどう持っていくか。例えば自尊感情は、最近幼少連携プログラムも都教委から出て、1年生のつながりも意識されたプログラムがある。中1ギャップについては新潟県の取り組みを見ると自尊感情とか自己肯定感を強化する取り組みが載っている。それを練馬区として生かすかどうか。

委員

思いやりか自尊感情で縦割り活動とかか。7、6、5年生の縦割り。

事務局

4年の二重丸と1年、3年の丸と、第Ⅱ期は第7学年が丸という方向か。第Ⅲ期は9学年。

思いやりの心のところ。第Ⅰ期で育てたい子供像としては、体験活動を通じて相手のことを思いやり親切にし、いたわり励ますことができる子供。第Ⅱ期では、体験活動を通じて人のやさしさを感じ、それを素直に受け止め、今日の自分があるのは多くの人々によって支えられているからであることに気付き感謝できる子供。第Ⅲ期では、体験活動を通じて自分の大切さとともに他の人の大切さを認め、ともにかけがえのない人間であることを自覚できる子供。というようなことが育てたい子供像として中間報告に出ている。

委員

不登校している子たちへの思いやりができたらい。学校へ来ない子供はもうちょっと難しい子供。来たらず来たでいろいろ波風を立てる。7年あたりが中学の段階では難しい。友達を自分だけで独占したい子がそれができなくて、じゃあ来ないといった子が出てくる。不登校が始まるのが5・6年生という話を聞くと、5・6・7辺りで思いやりができればいい。

事務局

4年生ぐらいになると、ギャングエイジと言われて人との関わりがすごく増えてくるときでもあり、逆にいろんな子とぶつかったり、けんかをしたり仲違いしたりというのがすごく多くなる。自分のわがままを通すことはいけないと分かっていつつも、相手にいじわるしてしまうときがある。お互いにやったことを許しつつも、自分も他人に対してやさしさを持って接していかなければいけないとか、そういうことを4年生辺りで押さえておくと、高学年の女子のグループ関係というのは小学校5・6年辺りから始まるので、多少違ってくるかと思った。

委員

ギャングエイジの結果、不登校につながることはあるのか。そうすると4年か5年でやるのがいいのか。

事務局

不登校についても、クラス替えがけっこう大きなきっかけになるときがある。友達関係が4年生まで良好だったのに、クラス替えがきっかけで仲良かった子と離れてしまったから、うまくいかないという話も。

委員

小学校で毎年のクラス替えはタブーなのか。それとも何年に1回とか大体の形があるのか。

委員

3年と5年。毎年やるという校長先生もいる。校長先生によって違う。基本的には2年ずつぐらいはセットにする。

委員

中学校は毎年クラス替えをして、特に問題がなければ同じスタッフで上がっていく場合が多い。小学校の場合は2年間ずつやっていくメリットは何か。どの辺を狙ってなのか。

委員

集団をつくったりルールをつくったりして、それを定着させるのにだいたい2年スパンみたいな感覚があるのかもしれない。私は5・6年以外は担任は毎年替えてしまう。子供たちの関係が教師も含めてあまり固定化してしまう。そして小学校は教科担任ではないために担任意識がすごく強い。

アドバイザー

今の思いやりで言うと、不登校といじめの問題の根は同じ。人と人との関係がうまく取り結べないという実態が背景にある。さらにその根にあるのは欲求不満耐性ができていない子供たちが増えてきたこと。我がままであることのほうを認める指導が多くなってきているから、気に入らない子供と一緒に遊ぶことが耐えられない。大人はある程度、公の世界では特にがまんする。子供はお互いに欲求不満耐性が不足しているから、我がままをお互いに主張し合う。これは戦後教育のマイナスの成果。人間関係と体験活動を結びつけたものを意識して、生活科、学級活動、体験活動に関わった指導を、どこかそれぞれの期に置いたほうがいい。

第Ⅱ期と言われる5・6・7年辺りが非常に大事。中1ギャップとは、6から7にかけて飛躍的に不登校の生徒が増えてしまうこと。全国平均で約4倍から5倍増える。なぜ一貫校か、なぜ連携校か。一つはそのギャップをなるべくなくそうという話。そういう意味でこの思いやりで特化して言うと、第Ⅱ期は大変重要。まさに思春期の入り口、あるいは思春期になった途端、変り目のところ。ここは敢えて二つ置いてもいいと思う。

事務局

では思いやりのところ、第Ⅰ期については生活科を1・2年で二つ入れているが、どちらかでもいい。第Ⅱ期を少し厚くして、一つどこか増やしてもいいというところ。

第Ⅱ期で7学年に私が置いたのは、小学生から中学生になるところで、クラス編成、他校からも転入があると考えた。ここで学級活動などの中でお互いを知る体験活動がうまくできれば、早い時期に互いを知る関係づくり、学級活動でつくっていけば他者のこと、友達のことをより早く知って思いやる心も育つという思いを持って入れた。あと5か6のところの一つ丸を付ける形で考えていきたい。

アドバイザー

7年生に他校から入ることは、学校選択制と小中の切れ目はそのまま継続するのである。

事務局

社会連帯の自覚に話を移したい。キャリア教育とも関わりがあるが、職場体験なども含めてということで、Ⅲ期を手厚く考えたという話をした。中間報告に戻ると、Ⅰ期では、学校や地域の人々を愛し協力して楽しく活動する子供。Ⅱ期では、人と人のつながりの大切さを理解し、地域社会の一員として生活できる子供。Ⅲ期では、地域社会の一員としての誇りを持ってより良い社会の実現と発展につとめる子供。という子供像が述べられている。第Ⅰ期でいうと、社会科では3、4年生辺りが地域との関わりが出てくるので、この辺りで一つ丸を付けるとバランスも取れる。

委員

小学校3年生の社会科の単元名は「私たちのねりま」。郷土資料館とか行ったりする。副読本も3年生から。

事務局

3年の社会で取り上げてはどうかということ。第Ⅱ期はいかがか。

委員

クリーン運動に参加し始めるのは、うちは3年生から6年生まで。豊溪中さんと合同でやっている。中学生が面倒見てくれる。

委員

いい。それは絶対これに入れたい。Ⅱ期とⅢ期と両方に関わるが、この辺で異学年集団の活動みたいなものを考えたい。Ⅱ期は実動部隊で班長レベルのことをやるとしたら、Ⅲ期はやはり活動でプロデューサーをやってほしい。私は社会連帯のⅢ期についてはキャリア教育の部会があったから、職場体験はあまりイメージがなかった。それよりも、地域での活動、クリーン運動でもいいが、地域に出る活動。

委員

広場の祭典。

委員

にここにボランティア。

委員

この桜小中がある地域に貢献できるボランティア活動をつくればいい。地域の人も認めてくれるようなものを子供たちの企画で運営できる。そのプレとしてⅡ期でクリーン運動とか、区がやっているものをやって、実際に活動をサポートしていくような扱い、そういう体験をⅡ期にやらせて、Ⅲ期はその学校オリジナルのボランティア活動を全学年巻き込んで企画・運営していく。というような方向だと良いのではないか。

アドバイザー

そうすると生徒会とか児童会等の活動になる場合がある。そういう意味で提案をしていただくのはいい。学習指導案は難しいので、例えば計画、取り組みの事例とか。

委員

縦割りで9年いってしまうとすごく大変で、それもまた工夫が必要だと思うが、その活動で伸びていくものはたくさんある。自分達で考えて毎朝挨拶運動をすとか。自分たちでやる分にはとてもいい活動。

アドバイザー

児童会の参加は5・6年。

委員

4年生から。

委員

小中一貫になって、生徒会があったとしたら4年生からになるのか。

委員

その辺りが調整中。

委員

イメージとしては、5・6・7・8・9はきっと一括の自治組織。

ただ、9年生が言うことを1年生は理解できない。それをどうやって集約するのか、テクニックが必要。

委員

4年生が仕切るのか、どうするのか。縦割り班も1から9の縦割り班はなかなか厳しい。時程も揃わないということもある。

委員

だから4年生で一括りにしてあげて、やり終えたら2分の1成人式。すっきりする。冠になるのがいい。

アドバイザー

桜小中で一番大きかったのは、6年生がリーダーではなく、5・6年生はがまんもしてもらいながら、最終進化形は9年生という形でものを組んでいく。先生たちの意識改革。

委員

一番心配しているのはこの学校で、6年のところを目指して小学校と中学校の教員がうまく融合しなくて、6年で私立目指して進路指導されてしまうと、とても目が当てられない。

アドバイザー

そういう個別なことはあるが、やはり9年生の姿を見て憧れという部分で。今ある行事とかいうところから組み立てたらいかがか。

委員

やはり中2、中3はすごい。小学校の教員が考えるよりも自治意識があって自覚している。人数が少ないけど。教員よりもきちんと、しっかり子供の指導やサポートができています。中3というのは十分それだけの力を持っている。

委員

一緒になってしまったほうが中学生にとっても、小学生の前でやたらなことはできない。

委員

先ほどの話だが、5年、6年のどちらかでボランティア活動で。私は実績があるからクリーン運動がいいと思う。Ⅲ期については、やはりオリジナルの地域に出る活動を考えてもらう。

アドバイザー

桜中は小中の中では、あの地域は福祉施設、高齢者施設があるところなので、そういう意味での活動は組み立てたい思いはある。

事務局

社会連帯の自覚の具体的なところ、第Ⅰ期では3年生、第Ⅱ期は5年か6年でクリーン運動等の活動を取り上げたらいいのでは。第Ⅲ期では学年が8年生か9年生で、自分達で考えて地域に踏み出していけるような活動を視野に入れて考えることでよいか。

少し項目を減らさなければいけないのではないかとと思われるところもある。次回しっかり資料作成の分担は決めたい。例えば規範意識で、特に小1プロブレムに対応するような事例はこういうのがある、思いやりの心を育てるのに4年生の学級活動でこんなことをやっていくといいとか、また小学校の先生方には2分の1成人式で実際にやっていただいた事例があれば、ぜひ

ひ紹介していただきたい。中学校の先生方には卒業期の道徳や自尊感情を育むときにどのような指導をすると効果的であるかとか、そういう資料などを持ち寄っていただけると、選択ができる。それをぜひお持ち寄りいただきたい。

アドバイザー

まず小林先生のをモデルにしてこれを完成しよう。次回までに粗々つくったほうがいい。今の議論で大変いいと思ったのは、この叩き台の丸印を元に議論したが、重点化の議論ができたのではないか。もう1点、こういう形で発信してこういう提案をしてもいいのではないかという事柄も出てきている。これは非常にいい提案。そうしたものを生かしていただきたい。

事務局

次回の確認。叩き台になるマトリックスは、去年割って担当したところをもう少しやってもらい、次回までにあったほうがいい。今年なった方は、資料作成のときに頑張ってください。昨年度担当していただいたのは自尊感情が小林先生で、生命の尊重が濱元先生、社会連帯が久能先生。思いやりの心が相田先生。規範意識は今日欠席の山崎先生。

委員

それぞれの学校の副校長先生に、Excel ファイルを送る。消してこの上にかぶせる。

事務局

次回第3回目の日程：6月7日（月）会場：教育委員会室 4時から